一三世紀後半のキプチャク汗国とロシア

―― 汗国史へのエチュード（一）――

加　藤　一　郎

Золотая орда и древняя Русь во второй половине XIII века

попытка изложения истории золотой орды

Ичиро Като

содержание

Время от Батыя до Берке
Распространение мусульманства в золотой орде
Смута монгольской империи и независимость золотой орды
Война с улусом Хулагу и союз с мамлюкском государством
Русь во время хана Берке
Хан Менгу-Тимур и его политика к русскому духовенству
Внешняя политика хана Менгу-Тимура
Повышение Ногая
Столкновение между Тохта и Ногаем
Русь во время двоевласти золотой орды
Восстановление господства над Русью ханом Тохта

バトウ汗からベルケ汗へ

キプチャク汗国を支配したジュチ家も含めて、モンゴル諸王家は、汗が他界すると、その後継者をめぐってたびたび内紛を経験してきた。汗位をめぐる内紛には、通常、死んだ汗の息子たちとその兄弟および従兄弟たち、さらには、各汗国の王家以外の諸王侯も介入した。また、一時的な措置として、死んだ汗の皇妃が摂政という立場で過渡的に政権を掌握したこともあった。

キプチャク汗国の創設者バトゥは後継者として長男サルタクを考

えており、これをモンゴル世界帝国の大汗モンケに承認してもらうために、彼をモンケのもとに派遣した。モンケはこれを承認したが、バトゥが、サルタクのカラコラム逗留中の一二五六年に他界してしまったために、バトゥの弟ベルケが、サルタクの不在を利用して汗位をうかがった。

ベルケはバトゥの意向と大汗モンケの承認に抗しているわけであるから、不利な条件のもとにおかれていたが、サルタクがネストリウス派のキリスト教徒であり、ベルケがイスラム教徒であったことが、後者に有利に作用した。汗国の徴税人に登用されるなど、有力な社会勢力となっていたイスラム商人や、ホレズムやブルガール地方のイスラム聖職者層がベルケを支持したからである。すなわち、「イスラム商人層はベルケのことを、キリスト教徒であるサルタクや、異教徒であるモンゴル人汗とは異なって、古くからの中央アジア的様式の聖職者層と官僚層とを保護し、都市生活の開花を促進することができる同門の徒とみなした」[1]からである。

サルタクは汗位についたものの一二五七年に他界してしまったために、大汗モンケは、あくまでもバトゥの意向に忠実で、サルタクの息子（弟という説もある）ウラグチをキプチャク汗に任命し、バトゥの未亡人ボラクチンを摂政皇后に指名した。ところが、このウラグチもすぐに他界してしまった（一二五七年）ために、ここで再度汗位継承問題がもちあがった。摂政ボラクチンは、バトゥの直系を維持しようとして、バトゥの次男トゥガンの息子トゥダ・メングを汗位につけようとしたが、ベルケ支持派の強硬な反対にあった。ジュチ家内部で孤立したボラクチンは、ペルシアのイル汗国の当主フラグの支持をあおごうとした。[2] このボラクチンの策動は実現をみるにいたらず、彼女は結局殺されてしまったものの、この事件は、のちにキプチャク汗ベルケとイル汗フラグとが対立し、これが二つのモンゴル汗国とのあいだの百年戦争にまで発展していく過程の遠因となっている。ベルケが待望の汗位についたのは、おそらく一二五八年のことであった。

汗国へのイスラム教の浸透

ベルケは汗位につく以前にイスラム教に帰依していた。[3] その時期については、一二四〇年代とも、モンケを大汗に推挙したクリルタイからの帰途すなわち一二五二年とも言われるが、[4] いずれにしても汗位につく以前のことであり、たとえ、汗位についてからのイスラム教保護政策はそうだとしても、イスラム教への個人的帰依までも「純然たる政策上の考慮に出たものである」[5]（ヤクボフスキイ）と断定するのは、当をえていないであろう。

ベルケがキプチャク汗になったことによって、イスラム教は汗国に急速に浸透し、それまで、主としてシャーマニズムを信仰していたモンゴル人貴族のあいだにも、イスラム教に改宗する者が登場し

た。ただし、イスラム教は都市文化を代表していたから、遊牧生活の旧来の慣習や信仰に執着する一部のモンゴル人貴族は、このイスラム教の浸透をこころよく思っていなかった。彼らは、イスラム教の受容を、自分たちの権利の侵害、その結果としてのキプチャク汗の中央集権的権力の強化と受けとったのである。[6] しかし、イスラム教が汗国に着実に浸透していったことは確かであり、サファルガリエフは、イスラム教が汗国において高い地位を獲得した結果を、比較的高度なアラブの文化がキプチャクの土地に流入するようになったこと、全能の神アラーとその地上における代理人（汗およびその支配層）への服従を説くイスラム教が大衆のあいだに普及することによって、支配層の政治的・経済的搾取が容易となったことの二点に整理している。[7]

モンゴル帝国の内紛とキプチャク汗国の自立

キプチャク汗国はモンゴル世界帝国の構成部分であり、その汗はカラコルムの大汗に臣従していた。バトゥは「一族の長老」として、また大汗モンケの盟友として世界帝国の西半部の実質的な支配者であったが、サルタクを後継者として承認してもらうために大汗モンケのもとに派遣していることからも判るように、たとえ形式的であるにせよ大汗に臣従していた。

だがベルケ汗の治世に入ると、モンゴル帝国とキプチャク汗国との宗主国・属国関係、大汗とキプチャク汗との主君・臣下関係は崩れていった。この契機となったのは、大汗モンケ他界（一二五九年）後に、その弟クビライと末弟アリク・ブガとのあいだに発生した大汗位をめぐる抗争であった。クビライ派は中国北部の開平府において、アリク・ブガはカラコルムにおいてそれぞれクリルタイを開き、この二人を大汗に推挙していた。

モンゴル帝国に二人の大汗が登場するという事態にあって、キプチャク汗ベルケはアリク・ブガを支援し、一方、ペルシアのイル汗国のフラグは兄のクビライを支援した。したがって、全モンゴル帝国の視野からこの紛争を眺めると、「中国とイランという高い文明をもった地域の汗」が、後進的な「ヴォルガ・ステップ地帯の支配者ベルケ」と「モンゴリアでの遊牧的基礎を尊重していたアリク・ブガ」に対抗していたことになる。[8]

結局、この抗争はクビライの勝利に終り、クビライが唯一の大汗となるのであるが、ベルケはこのクビライの権威を認めようとはしなかった。キプチャク汗国の貨幣には、主君であることを明示するように、大汗の名が刻印されてきたが（モンケの名、内紛中はアリク・ブガの名）、ベルケはクビライが唯一の大汗となっても、彼の名を刻印しようとはせず、その代りにバグダッドのカリフの名を刻印させ、これによって、「カリフの精神的権力のみが、自分の上位にあること」、[9] すなわちキプチャク汗は大汗クビライには臣従しな

いという姿勢を明らかにした。さらにベルケは、モンゴル帝国への臣従を誓ってサライにやってきたグルジアやルームの使者・国王をもはやカラコルムには送ろうとしなかった（グルジア王ダヴィド四世の例）。

このように、キプチャク汗国はベルケの治世に入ると、クビライの元朝から政治的な自立をとげるのであるが、両国の関係がまったく断たれたわけではない。ベルケ以降のメング・チムール汗、トゥダ・メング汗は大汗クビライから承認を受けているし、ウズベク汗は、中国領内の自分の分封地からの収益を請求するために使者を元朝に派遣している。だが、これはあくまでも形式的なものにとどまり、大汗グユクがキプチャク汗国の政治に直接関与したというような、大汗の政治的権威はもはや汗国には及ばなくなった。

イル汗国との抗争とマムルーク朝との同盟

ペルシアのイル汗国とキプチャク汗国は、ともにモンゴル人の国家でありながら（ベルケとフラグはチンギス汗の孫で、従兄弟同士である）、一二六二年から公然とした戦争状態に入った。対立の原因は、征服地からの収益の分配問題と領土問題とであった。[10] ベルケは、のちに汗国において実力をふるうようになるノガイの率いる三万の軍をイラン方面に派遣し、これをイル汗国側が迎え撃つことから、両汗国は戦争に突入した。一二六二年にはじまるこの戦争は、二人の汗があいついで他界した（フラグは一二六五年、ベルケは一二六六年に他界した）のちも、ほぼ百年にわたって、断続的ではあるが継続され、両汗国の国力を消耗させると同時に、エジプト、ビザンツ帝国、ヴェネツィア、ジェノヴアなど東地中海世界の国際関係に深い影響を与えた。

ここで、両汗国の関係に、軍事的・地理的に重要な位置を占めるようになったのが、エジプトとシリアを支配していたイスラム教国家のマムルーク朝であった。一三世紀後半にはアラビア半島にまでその版図を拡げていたマムルーク朝は、イランの地にフラグのイル汗国が登場すると、東部国境方面でその直接的脅威をうけることとなったのである。イル汗国軍はシリアに侵入し、一二六〇年にはエルサレム北方のアイン・ジャルートでマムルーク軍と衝突し、ここで大敗を喫すると、イスラム国家という共通の敵と戦うための同盟を西ヨーロッパの十字軍と結ぼうとしていた。一方、ベルケ治世下のキプチャク汗国もアゼルバイジャン地方の領有をめぐって、イル汗国と対立していたから、ここに、十字軍と同盟しネストリウス派のキリスト教に傾いていたフラグのイル汗国を共通の敵として、さらにイスラム教を共通の信仰として、キプチャク汗国とマムルーク朝とのあいだに同盟が結ばれる可能性が生まれた。マムルーク朝のスルタン・バイバルスが一二六三年にベルケに送った親書は、「予は正しい信仰の友であり、一方、この敵すなわちフラグは異教徒で

ある。フラグは邪悪にもイスラム教徒を迫害し、その土地を奪った。予は汝が汝の側からフラグに向って前進し、予が予の側からフラグに向って前進することを思案してみた。われわれは一度に彼を攻撃して、この土地からフラグを追い出すであろう。予は、フラグの手中にある（すべての）イスラム教徒の土地を汝に手渡すであろう」[11]と述べているが、これは、両国の同盟の性格を的確にあらわしている。この親書を契機として、両国の同盟が成立し、これ以降、双方はきわめて友好的な関係をとり結んだ。さらに、両国の交通が盛んになることによって、当時としては先進的なアラブ・イスラム文化が、キプチャク汗国に流入することとなったのである。

ベルケ治世下のロシア

ベルケの政治的関心は、前述したようにモンゴル帝国内の紛争とアゼルバイジャン方面への進出政策に注がれており、彼はロシアに対してはあまり関心を向けなかった。だが、彼は、南西ルーシでのダニイル・ロマノヴィチ公の反モンゴル運動と北東ルーシでの反モンゴル住民蜂起に対処しなくてはならなかった。

南西ルーシの覇者ガリーチ・ヴォルイニ公国のダニイル・ロマノヴィチ公は、やむやむバトゥに屈服していたが、ベルケの時代に入ると再度汗国の支配に反対する動きをみせはじめ、西方に台頭しつつあったリトヴァの勢力に注目していた。

リトヴァはミンドフク（ミンダウカス）のもとで国家的統一に成功しており、一二四〇年代に入ると、チュートン騎士団の攻勢が一時的に弱まった機会をとらえて、東のロシアに拡張を企てた。彼は、一二五〇年代には、ヴォルイニ公国の北部に隣接する「黒いルーシ（チョールナヤ・ルーシ）」の諸市を支配下においた。西からはチュートン騎士団、東からは汗国軍の侵入に脅えていたこれらの諸市は、強力な軍隊をもつリトヴァをむしろ歓迎したのである。ミンドフクは、一二五〇年にローマン・カトリックに改宗し、チュートン騎士団にジムート地方の一部を割譲することで、西からの騎士団の圧力を緩和すると、今度は東方に隣接するガリーチ・ヴォルイニ公国との関係を改善しようとした。

ガリーチ・ヴォルイニ公国のダニイルは、汗国と対抗するためにも同盟国を必要としていたし、ミンドフクも、西方の脅威チュートン騎士団との平和が一時的なものにすぎないことを承知していたから、双方の交渉は容易に進んだ。まず一二五一年頃、ダニイルはミンドフクの姪を妻に迎えた。そして、ローマン・カトリックとギリシア正教という宗教問題の調整をはかるために、ミンドフクの息子ヴォイシェルクがギリシア正教に改宗した。このヴォイシェルクの仲介で、一二五四年にはダニイルとミンドフクのあいだで平和条約が結ばれた。これによると、ミンドフクは「黒いルーシ」をダニイルの息子ローマンに譲り、ローマンはミンドフクの家臣となった。

またミンドフクの娘（ヴォイシェルクの妹）が、ローマンの弟のシヴァルンに嫁ぎ、ヴォイシェルクはギリシア正教の僧院に入った。[12] このような婚姻関係と家臣関係の締結、宗教上の問題の調整によって、リトヴァとガリーチ・ヴォルイニ公国との同盟は成立した。このことは、ロシアの西部国境地帯に、強力な反モンゴル勢力が出現する可能性を与えることとなった。

北東ルーシに較べて、南西ルーシに対する汗国の支配は比較的ゆるいものであったが、ミンドフクとダニイルの同盟が成立しているころ、汗国はこの支配を強化しようとしていた。しかし、この地方に駐屯する汗国軍司令官クレムサの兵力は少く、クレムサ軍は、ガリーチ・ヴォルイニ公国の略奪を命令されていたにもかかわらず、リトヴァとの同盟に成功していたダニイルがクレムサ軍に対する反撃を組織していたために、この任務を果たすことができなかった。[13]

ベルケは、このクレムサ軍の不首尾を知って、猛将ブルンダイの率いる強力な汗国軍を南西ルーシとリトヴァに派遣した。リトヴァの台頭は汗国のロシア支配に対する脅威となることを察知したベルケは、ダニイルも含む南西ルーシの諸公を威嚇して、リトヴァから離反させること、リトヴァとガリーチ・ヴォルイニ公国との同盟関係を断つことを目指した。この意を受けたブルンダイは、汗国軍のリトヴァ遠征に参加することを南西ルーシの諸公に強要した。圧倒的な軍事的圧力に直面した南西ルーシの諸公は、この要求を受けいれざるをえず、たとえば、ダニイルの弟ヴァシリコはヴォルイニのベレスチエからリトヴァ領を略奪しながらブルンダイのもとにはせ参じた。ダニイル自身も、ブルンダイ軍のリトヴァ遠征には直接参加しなかったものの、リトヴァの支配下にあった「黒いルーシ」地方に侵入した。こうした動きに対して、リトヴァのヴォイシェルクとトフチヴィルは、ダニイルの息子ローマンを殺害するという挙に及んだから、汗国による南西ルーシとリトヴァの離反政策は成功したといえよう。さらに、ブルンダイは、一二五九年に、南西ルーシの主要都市の砦を破壊することを命じた。南西ルーシの諸公はこの命令に従わざるをえず、ダニーロフ、ストジェスク、クレメンツ、ルーツク、ヴォルイニのウラヂーミルといった各市の砦がうち壊された。[14]

ブルンダイ軍の遠征によって汗国軍の軍事的制圧下におかれた南西ルーシは、リトヴァといった西方の同盟国に依拠して汗国の支配に抵抗する可能性を奪われ、ここに汗国の完全な支配下に入った。この結果、バトゥの時代からしばしば反抗的態度を示し、北東ルーシに較べて一定の独立を確保していた南西ルーシも、北東ルーシと同様に、汗国の完全な属国と化した。南西ルーシの諸公は、公位を認可してもらうために、汗のヤルリイクが必要となったし、バスカク、ダルガチといった汗国の役人が南西ルーシの各地に任命されたのである。ダニイルは失意のうちに一二六四年に他界した。[15]

南西ルーシでのダニイルの反モンゴル運動が平定されると、一二六二年には、北東ルーシのウラヂーミル、ロストーフ、スーズダリ、ヤロスラーヴリの諸市で汗国の支配に対する反乱が勃発した。反乱の中心となったのは、バトゥの遠征のいたでから立ち直っていないウラヂーミルではなく、ロストーフであった。反乱の拠点は市の民会であり、ここに参集した住民は、その憤激をまず汗国の徴税人に向けた。徴税人の多くは、中央アジアからやってきたイスラム商人であったが、彼らは、租税を支払えない者に高利貸しをしたり、債務者を奴隷に売りとばしたりすることで汗国の圧制の象徴となっていたからである。[16] こうした徴税人のなかで悪名が高かったのは、ヤロスラーヴリのゾシマなる人物であり、彼は住民に殺された。[17]

ベルケはこのようなスーズダリ地方の住民反乱に対して懲罰遠征軍を派遣して、これを鎮圧した。しかし、この反乱は汗国の統治様式を転換させ、ベルケの次のメング・チムール汗は、イスラム商人による徴税の請負いを中止し、汗国の役人に直接徴税にあたらせることとした。

メング・チムール汗と汗国のロシア教会政策

ベルケ汗は一二六六年に他界し、バトゥの孫にあたるメング・チムールがその後継者となった。

モンゴル人征服者は、チンギス汗のヤサにも「彼（チンギス汗…引用者）はいずれの信仰にも重きをおかず、すべての信仰を尊重することを決定した」とあるように、宗教的には寛容な政策をとっていた。

キプチャク汗も例外はあるにせよ、このヤサの指示に忠実であり、自分がどの宗派に帰依していようとも、これを強制的に臣民に押しつけたり、他の宗派を迫害したりはしなかった。ベルケがイスラム教に改宗したといっても、その後のメング・チムール汗やトフタ汗はイスラム教徒ではなかった。[18] またイスラム教徒として名高いウズベク汗にしても、「汗位につく以前はイスラム教徒ではなく、汗位についてからイスラムを受けいれた。そして、いかなるもくろみでそうしたにせよ、予言者の法ではなく、伯父や父の慣習にしたがって統治した」[19]という状況であった。

キプチャク汗はロシアを統治するにあたって、ロシアの教会や教会の所領を人口調査の対象から除外した、すなわち課税対象とはしなかった。年代記は一二五七年の事件について、「この年の冬、タタールから人口調査官がやってきて、スーズダリ、リャザーン、ムーロムのすべての土地を調査したが、……僧院長、修道院長、修道士、司祭、補祭、すべての教会構成員は調査しなかった」[20]と記している。そして、メング・チムール汗は、てこのようなロシア教会に対する寛容政策を文書として確定した。彼が「ルーシの主教と誰かれの区別なくすべての教会の人々」に与えたヤルリイクによれば、

教会や修道院の所領とそこで働いている人々は課税対象とはならず、すべての聖職者は兵役を免除され、さらに、汗国の役人が教会の所領に手をつけたり、聖職者に何らかの「奉公」を求めることは死刑をもって禁止されたのである。[21] 後年、イヴァーン四世は、教会所領の制限を試みようとしたとき大きな抵抗に遭遇した。総主教マカリイは、「不信心な汗の多くも神聖なる教会と修道院から何もとらなかったし、あえて、不動産を移そうとはしなかった……彼らは神聖なる主教にヤルリイクを与え、誰かが修道院や教会の土地を攻撃したり、とりあげることを禁止した」[22] と述べて、汗国の教会保護政策を引きあいにだしながら、イヴァーン四世の政策に反対しているほどであるから、この政策はロシアの聖職者に強く好意的な印象を与えていたと思われる。

このような汗国の教会保護政策は、短期的には、ロシア人のあいだで大きな道徳的・精神的権威をもっていた聖職者の汗国に対する服従を保証することによって、ロシア人の反モンゴル意識を弱め、汗国のロシア支配を容易とした。しかし、長期的には、教会を政治的・経済的に強化することによって、教会をロシアの中央集権下のセンターとし、その結果、汗国のロシア支配を揺がしていくこととなった。すなわち、課税対象とならなかった教会は、経済的に豊かとなり、政治的に分裂状態であったロシアにおいて、唯一の全ロシア的な組織に成長していったのである。[23]

メング・チムールの対外政策

メング・チムール治世下のキプチャク汗国が順調な発展をとげていたころ、中央アジアの情勢は不穏な動きを示していた。第二代大汗ウゲデイの孫カイドゥがクビライの宗主権を認めず、彼に公然と反旗をひるがえしており、大汗クビライはそれに対して、チャガタイの曾孫バラクをチャガタイ汗に任命して、カイドゥに対抗させてたからである。

中央アジアでのカイドゥとバラクの戦争にあたって、メング・チムールは、最初は、バラクに、のちにはカイドゥに助勢したが、この矛盾した態度は、彼が、バラクとカイドゥのどちらが勝利するかというよりも、キプチャク汗国の商業的利益、すなわち東西貿易の要路であるサマルカンド・ブハラなどのトランスオクシアナ地方を戦乱による荒廃から守ることを第一としていたためであった。事実、バラクがメング・チムールの支援を受けてこの地方を占領したことは、東方とのキャラバン貿易に大打撃を与えていたのである。[24]

メング・チムールの五万の援兵をえたカイドゥはバラクを撃破し、一二六九年春、キプチャク汗国、バラクのチャガタイ汗国、カイドゥのウゲテイ汗国の代表が和議のクリルタイを開いた。この和議によって、三つの汗国のあいだに平和が確立され、トランスオクシアナ地方は三汗国のあいだで分割された。さらに、カイドゥは「中央

アジアの大汗」に推挙され、イル汗国に対する三汗国の同盟が締結された。この同盟は、この三汗国が、チンギス一門の血筋からすればトゥルイ家の元朝ならびにイル汗国と完全に訣別したことを示していた。

メング・チムールは、一二七〇年後半に、ヤス人、チェルケス人に対するカフカース遠征を企てた。このカフカース遠征には、すでに汗国の「ウルスニク」となっていた、すなわち汗国に臣従を誓っていたロシアの諸公も多数参加した。一二七七年二月、汗国軍はアラン人の町ヂェヂャコヴォを占領し、メング・チムールはテレク川西岸にあったヂェヂャコヴォ市の代りに、東岸に新しいヂェヂャコヴォ市を建設した。この町は、デルベンド市、マジャール市と並んで、汗国のカフカース支配の中心となっていた。[25]

ノガイの台頭

メング・チムールが一二八二年に他界すると、ノガイ（「犬」を意味する）なる人物が汗に並びたつほどの権威をもつようになり、汗国は汗とノガイを中心とする二重権力時代に入った。

ノガイはジュチ一門では傍流にあたるとはいえ、ベルケの治世には、イル汗国との戦争の軍司令官であったし、メング・チムールの治世には、マムルーク朝やビザンツ帝国側からキプチャク汗に匹敵する実力者とみなされており、軍の指揮権、他国との交渉権をもつ「ベクリャリベク（長老エミール）」の地位についていた。彼は、このように高い政治的地位とともに、ドナウ川から黒海北岸の南ロシア・ステップ地帯に広大な所領をもっており、モルダヴィアに本営（ユルト）をおいていた。[27]

ドナウ川下流地域に強大な勢力を保持したノガイは、メング・チムールの後継者問題に干渉し、後継者に予定されていたメング・チムールの甥トレボガに代って、メング・チムールの弟のトゥダ・メングを汗位につけた。[28] しかし、このトゥダ・メング汗はいささか複雑な事情のもとで一二八七年に退位してしまい、[29] トレボガが汗位についた。

新しい汗トレボガは当然のことながら、トゥダ・メング汗を支持していたノガイと不和になった。トレボガはノガイの殺害を計画したが、これを察知したノガイはトレボガを逮捕し、彼を故メング・チムールの息子トフタに引き渡した。このトフタは、父メング・チムールはトレボガによって殺されたとノガイから吹きこまれており、トレボガとその息子を殺し、自らが一二九一年に汗位についた。

トフタ汗とノガイの対立

このトフタ汗は、ノガイの援助を受けて汗位についたものの、きわめて精力的な人物であり、単にノガイの「政治的あやつり人形」の地位にとどまろうとはせず、それどころかノガイをとりのぞいて、

キプチャク汗国の再統一をはかろうとした。[30] トフタはノガイの勢力圏に軍を進め、両軍は一二九七年か一二九八年にヤサ（プルート）川付近で衝突した。二〇万の騎兵を主力とするノガイ軍は、トフタ軍を撃破し、トフタはかろうじて戦場を離脱し逃亡することができたという（第一次会戦）。

第一次会戦に勝利を収めると、ノガイはクリミアに軍をさし向けた。当時、ジェノヴァ人が黒海貿易の重要拠点であるクリミアを独占していたが、ライバルのヴェネツィア人がノガイの力を借りてこの独占をくつがえそうとしてからである。ノガイは女婿アクダンをクリミアに派遣して徴税させようとしたが、クリミアのカッファ市のジェノヴァ人住民はこのアクダンを殺してしまった。これに激怒したノガイは、大軍をクリミアに派遣し、カッファやスダクなどの大都市を略奪させた。[31]

しかし、このような戦果を収めたノガイの王国も、その絶頂点の時期に内部的な亀裂にみまわれた。ノガイの陣営のなかで、戦勝の分け前をめぐって、ノガイとその三人の息子たちジェケ、テケ、トゥライと、その他のノガイ派のエミールたちのあいだで紛争が起り多くのエミール（マジ、スドン、ウトラジ、アクブグ、タイタといったエミール、三万の騎兵）がトフタ側に寝返ったのである。

この機をとらえて、トフタ汗は再度、ノガイに対する戦いを起した。この第二次会戦は一二九九―一三〇〇年にクカンリイク――ポルターヴァ県のカガムリイク川――で起り、今度はトフタ側が勝利を収めた。ノガイはあるロシア人の兵士に殺されたという。

ノガイの死後、息子たちはノガイの所領を守ろうとしたが、二人の息子ジェケとテケのあいだに後継者争いが起り、テケはジェケに殺された。ジェケは、残存のノガイ軍とともに、最初はモルダヴィアに、ついでブルガリアに入った。前ブルガリア皇帝ゲオルク・テルテルはキプチャク汗ではなく、ノガイを宗主とみなしており、ジェケに自分の娘を嫁がしていたし、現ブルガリア皇帝スミレスもノガイにまったく依存していたという事情があったためである。このように、ブルガリアで強い影響力をもっていたノガイ一族のジェケは、一二九八年にブルガリア皇帝スミレスが他界すると、前帝テルテルの皇子スヴェトスラフの承諾をえて、ブルガリア皇帝になった。だが、これもつかのまのことで、トフタ汗からの攻撃を恐れたスヴェトスラフは、ジェケを裏切り、彼を投獄、殺害して、自らが皇位についた。[32]

ノガイの三人の息子のうち、残ったトゥライはトフタ汗の代理として旧ノガイ領に任命されたサライブガと協力して、一三〇一―一三十二年トフタに対する反乱を計画していた。トフタの弟であったサライブガは兄をしりぞけて、汗位につこうとする野心をもっていたのであろう。だが、この計画は事前に露見し、トゥライとサライブガはトフタの軍に殺された。

こうしてノガイ一族は滅んだ。トフタ汗は旧ノガイ領を二人の息子トゥクルブガとイリ・バザールに分け与えた。メング・チムールは汗の時代から独立王国と化していたノガイの王国すなわちバトゥのウルスの右翼はふたたび、キプチャク汗トフタの支配下に入ったのである。

汗国の再統一を達成したトフタは一三一〇―一三一一年、汗国の幣制改革を実施した。「一三世紀においては、キプチャク汗国の各経済活動地域（クリミア、ヴォルガ、ブルガール、ヴォルガ川下流地域）では、外形も雑多で、重さも市価もまちまちの独自の貨幣が流通していたとすれば、七一〇年の改革（トフタの改革……引用者）以降、規定の重量基準にしたがって鋳造されたサライのディルヘムが支配的貨幣となった。」[33] このときから、汗国の経済生活において、貨幣の鋳造センターとしてのサライの地位は高まり、同時に、サライのキプチャク汗の中央集権的権力も強化された。

汗国の二重権力時代のロシア

宗主国たるキプチャク汗国に、汗とノガイという二つの政治的中心が並立していたことは、公位や所領の獲得をめざして互いに抗争していたロシア諸公の関係にも強い影響を及ぼした。

一二七六年に大公ヴァシーリイ・ヤロスラヴィチが他界すると、大公位はアレクサーンドル・ネフスキイの息子ドミートリイ・アレクサンドロヴィチの手に移った。ところが、このドミートリイは、ノーヴゴロトなどの勢力を拡大することに夢中のあまり、主君たるキプチャク汗の好意をえることをおこたっていた。一方、彼の弟アンドレーイ・アレクサンドロヴィチは、当時の汗メング・チムールに忠勤をはげんでいた。彼は、一二七七年にメング・チムールがカフカース遠征を企てると、ロストーフ公ボリース・ヴァシリコヴィチ、ベローゼル公グレープ・ヴァシリコヴィチ、ヤロスラーフ公フョードル・ロスチラフヴィチとともに、手勢を率いて汗国の遠征軍に参加した。[34]

一二八一年にメング・チムールが他界し、トゥダ・メングが新しい汗になると、ドミートリイがノーヴゴロドとの紛争に忙殺されている間に、アンドレーイは大公位のヤルリイクを求めて、すぐさま汗国におもむいた。この結果、トゥダ・メングは、以前から汗国に忠勤をはげんでいたアンドレーイに大公位を与えた。アンドレーイは、カフガデイ、アルチェダイの率いる汗国軍とともに帰国し、ペレヤスラーヴリにいたドミートリイを攻撃した。

主君であるキプチャク汗がアンドレーイを大公に指名したのであるから、以前ならば、ドミートリイはこの決定に服するほかなかった。しかし、前述したように、この当時に汗国には、もう一人の実力者ノガイがいたために、ドミートリイはこのノガイの保護を求めた。ノガイとしても、汗と対抗するために、ロシアへ支配権をド

ミートリイを介して確保しようとしていた。[35] このような情勢に対応して、ロシアの諸公も、ノガイ・ドミートリイ派と、汗・アンドレーイ派に分かれた。トヴェーリ公ミハイール、モスクワ公ダニイルは前者に、ロストーフ公ボリース、ベローゼル公グレープ、ヤロスラーフ公フョードルは後者に組していた。

一二八三年、今度はドミートリイがノガイの援兵とともにロシアに帰国してきた。アンドレーイは彼と和解せざるをえず、大公位を譲った。しかし、アンドレーイは再度汗国軍の支援えて、ドミートリイを一二六五年に攻撃した。ドミートリイは、ノガイ軍とともに、さらに、トヴェーリ公ミハイール、モスクワ公ダニイルといった同盟諸公と協力してアンドレーイを撃破した。[36]

このように、トゥダ・メング、トレボガ時代の北東ルーシでは、キプチャク汗ではなく、ノガイの支援を受けたドミートリイが、中断期間はあるにせよ、大公位を確保し続けた。[37] しかしトフタが汗位につき、ノガイとの亀裂を深めていくと、情勢は変っていく。汗国の再統一を目指していたトフタは、汗国の属領であるロシアにおいてノガイ派のドミートリイが大公位についており、自分の権勢がこの地に及ばないことに不満であったからである。トフタは、ドミートリイのライバルであったアンドレーイを大公として承認し、汗派のロシア諸公にてこいれするために、自分の弟トゥダンの率いる汗国軍を北東ルーシに派遣した。この懲罰遠征軍は、ウラヂーミル、モスクワ、ドミトロフ、ヴォロク、ペレスラーヴリ、ユリエフ、コロームナその他の諸市を略奪し、ために、大公ドミートリイはプコーフに逃亡せざるをえなくなった。

キプチャク汗国に汗とノガイという二つの政治センターが存在し、互いに覇を競ったことは、北東ルーシに対する汗国の支配を弱めた。すでにメング・チムールの時代には、前述したように、イスラム商人による徴税の請負い制度は廃止されていたが、トゥダ・メング、トレボガ、トフタの治世になると、イスラム商人の代りに正規に任命された汗国の徴税官さえも姿を消し、ロシアの諸公が自ら徴税にあたるようになった。ノガイ派のドミートリイは、自分で徴税して、これをノガイのもとに送っているし、のちにウラヂーミル大公となったトヴェーリのミハイールも、やはり自分で徴税してこれを汗国に送っている。互いに抗争する汗とノガイは、ロシアの諸公を味方とするために（ノガイがロシア人の兵士に殺されたことからも判るように、ロシアの諸公の手勢も一定の戦力となっていたのである）、彼らに徴税権という特典を与えたのであろう。

トフタ汗によるロシア支配の再建

ノガイをとりのぞいて汗国の再統一の達成をめざしたトフタは、汗国の二重権力時代にたがの緩んだロシア支配をも再建しようとした。

一二九三―一二九四年のトゥダン軍の北東ルーシ遠征の結果、ノガイ・ドミートリイ派の諸公は、トフタの決定に服せざるをえず、一二九四年には、北東ルーシの全諸公がアンドレーイをウラヂーミル大公として承認することとなった。だが、この時点では、ノガイはまだ実力者として存在しており、トフタの権勢がノガイ派の諸公を完全に屈服させていたわけではなかったから、依然として、情勢は不安定なままであった。トフタはノガイに対する攻撃を準備するにあたって、ロシアの政治情勢を安定させておく必要に迫られ、汗使ネヴルイを派遣して、一二九七年に、彼のもとで、ウラヂーミルでロシア諸公会議を開かせた。この会議では汗使の臨席にもかかわらず、諸公は斬りあいをはじめそうになったが、ウラヂーミルの主教シメオンとサライの主教イズマイロの仲裁によって、流血にはいたらなかった。彼らは一旦は事態を収拾して散会した[38]。

だが、ロシア諸公間の紛争は、このウラヂーミル会議によっても収まらなかった。大公アンドレーイが、会議での調停事項を守らず、ライバルであった前大公ドミートリイの息子イヴァーン・ドミトリエヴィチの所領であるペレヤスラーヴリを奪おうと、軍をさし向けたからである。アンドレーイ軍の進撃は、ウラヂーミルとペレヤスラーヴリの中間にあるユリエフでドミートリイ派であったモスクワ公ダニイルとトヴェーリ公ミハイールの軍に阻まれたが、このペレヤスラーヴリ問題を討議するために、一三〇一年にドミトロフで諸公会議が再度開かれた。大公アンドレーイ、トヴェーリ公ミハイール、モスクワ公ダニイル、それにペレヤスラーヴリのイヴァーンが参加した。アンドレーイとミハイールが手を組んで、ダニイルとイヴァーンに対抗した。ミハイールもアンドレーイと同じくペレヤスラーヴリに何らかの権益を要求していたのに対して、イヴァーンはむしろモスクワ公ダニイルに好意的であったからである（事実、イヴァーンの死後、ペレヤスラーヴリはダニイルに帰属した[39]）。

このドミトロフ会議以後、それまで北東ルーシでは目立った存在ではなかったモスクワ公国が、めざましい領土的拡大をとげた。ダニイルはほんの数年間で、コロームナ、ペレヤスラーヴリ、モジャイスクを併合したのである。コロームナはモスクワ市の南東に、ペレヤスラーヴリは北東に、モジャイスクは西に位置していたからモスクワ公国はモスクワ市を中心として、四方に拡大し、ロシア中央部の要衝を抑えたことになった。

大公アンドレーイは、このようなモスクワの急速な拡大に不満を抱き、一三〇三年、汗国におもむいて、ダニイルの所業についてトフタに苦情を申したてた。すると、トフタ汗は、一三〇四年、ペレヤスラーヴリに諸公会議を招集させた。大公アンドレーイ、トヴェーリ公ミハイール、モスクワ公ユーリイ（ダニイルの長男、ダニイルはこの直前に他界していた）に加えて、トフタの使者と主教マキシムが参加したこの会議では、「紛争の中止を諸公に呼びかける

汗のヤルリイクが読まれた」[40]というから、北東ルーシの政治的安定を求めるトフタ汗の強い意志が、諸公に明示されたのであろう。懸案のペレヤスラーヴリは大公アンドレーイにではなく、モスクワ公ユーリイに帰属することが承認された。

以上の事件からも判るように、トフタ汗は、これまでのキプチャク汗に較べて、かなり精力的にロシアの政治に干渉している。彼は、「全ルーシの長老」の地位をもつウラヂーミル大公位を廃して、すべてのロシアの諸公を直接自分の家臣とし、諸公間の紛争を調停する機関として、汗国の高官を議長とする恒常的な諸公会議を設置するつもりであったという。だが、彼は、この計画を実施するために自らロシアにおもむこうとした途中で、一三一三年に他界してしまった。（続く）

注

（1）Г. Федоров-Давыдов, Общественный строй золотой орды, М., 1973, стр. 70.

（2）「バトゥの甥トゥガンの妻ボラクチン（正確にはトゥガンはバトゥの次男、ボラクチンはバトゥの妻……引用者）は、自分の（トゥガンの……引用者）息子トゥダ・メングが国を統治するようになることを望んだ。彼女は、大きな知恵と手腕をもっていたが、バトゥの息子たちの汗たちも、他のエミールたちも彼女に同調しなかった。彼女は、彼らが自分に同調しないことを知ると、フラグと関係を結び、彼に羽のない矢とベルトのないカフタンを送り、使者をつかわして、『えびらには矢はなく、矢のない弓が残っているだけである。来たれ、予は汝に王国を提供するであろう。』と述べさせた。」（エライニ）

В. Тизенгаузен, Сборник материалов, относящихся к истории золотой орды, том I, извлечения из сочинений арабских, СПБ., 1884 (Тизенгаузен I), стр. 506

（3）「ベルケはブラハ付近を通ったときに、ネジメッティン・クブルという『禁欲主義の指導者』の帰依者である長老シェムセッディン・エリバヘルジに出合った。彼の話はベルケに強い影響を及ぼし、ベルケは、エリバヘルジからイスラムを受けいれた。彼とエリバヘルジとのあいだの友情は深まり、エリバヘルジは、カリフのエリムスターシムと連絡をとって彼に誓い、彼に贈り物をするように勧めた。ベルケはカリフに手紙をしたため、贈り物を送った。」Тизенгаузен I. стр. 245.

（4）B. Spuler, *Die Goldene Horde*, Leipzig, 1943, S. 213.

（5）ヤクボフスキイ、グレコフ、『金帳汗国史』、六五頁。

（6）В. Егоров, Развитие центробежных устремлений в золотой орде, "ВИ", 1974, №8, стр. 39.

（7）М. Сафаргалиев, Распад золотой орды, Саранск, 1960, стр. 48.

（8）B. Spuler, S.41.

（9）В. Сафаргалиев, указ. соч., стр. 48.

（10）「タタール人が領有した土地、彼らがジェイフン川から西に向って支配した土地からの収益は、五等分されて、五分の二は大汗に、五分の二は軍（フラグの遠征軍……引用者）に、五分の一はバトゥ家に分

配されることになっていた。バトゥが死に、ベルケが汗位につくと、フラグは彼の分け前を差しとめてしまった。」（エリムファッダリ）

Тизенгаузен I, стр. 188. 「アランとアゼルバイジャンも、ジュチ家の所領と屯営地に入っていると言われていた。ここにこそフラグ家とジュチ家の双方から、紛争の原因と怨恨の動機が次々とあらわれてきた理由がある。」（ワッサーフ）

В. Тизенгаузен Сборник материалов, относящихся к истории золотой орды, том II, извлечения из персидких сочинении, М., 1941 (Тизенгаузен II), стр. 81.

(11) Тизенгаузен II, стр. 89.

В. Пашуто, Очерки по истории галицко-вольнской Руси, М., 1950, стр. 281.

(13) там же, стр. 282—283.

(14) там же, стр. 284.

(15) А. Насонов, Монголы и Русь, М., 1940, стр. 35.

(16) там же, стр. 52.

(17) エグゼンプリャールスキイはこのゾシマについて、「かつてはキリスト教徒の修道士でさえあったが、のちに、ある汗のバスカクに気にいられようとイスラム教に改宗した。彼は背教者に多くみられるように、以前の信仰と兄弟たちをののしり……さらに呪われたことには、以前の同胞を迫害した」と記している。

А. Экземплярский, Великие и удельные князья северной Руси в татарский период, с 1236 по 1505 г., том первый, СПБ., 1889, стр. 38.

(18) バトゥはモンゴル人固有のシャーマニズムを信仰し、その息子サルタクはネストリウス派のキリスト教徒であったという。ベルケはイスラム教に帰依したことで有名であるが、その腹心ノガイはビンザンツ皇帝の娘でキリスト教徒のエヴフロシニアと結婚している。また、メング・チムール汗は、自分の娘にキリスト教の洗礼を受けさせて、ロシアのヤロスラーフ公に嫁がせている。のちの、トフタ汗は、ビザンツ皇帝アンドロニクス二世の娘を、ウズベク汗は同じくアンドロニクス三世の娘を妻としている。こうした事例は、たとえ政治上の配慮からでたことであるにせよ、キプチャク汗たちにとっては、宗教問題はさして重要ではなかったことを示している。

(19) В. Григорьев, Достоверности ярлков, данных ханами золотой орды русскому духовенству, М., 1842, стр. 50.

(20) там же, стр. 30—31

(21) там же, стр. 124—126.

(22) J. Fennell, *The Emergence of Moscow 1304—1359*, Berkeley and Los Angeles, 1968, p.44.

(23) フェンネルは「こうして、逆説的ではあるが、タタール人は国家を犠牲にして教会を強化し、豊かにすることによって、国家の中央集権化と統一に、したがって、タタール人の支配の実質的崩壊に貢献したのである」と述べている。J. Fennell, op. cit., p.44.

(24) М. Сафаргалиев, указ. соч., стр. 53.

(25) там же, стр. 54.

(26) ノガイはラシードによれば、ジュチの第七子ブヴァルの息子タタールの子である。したがってノガイはジュチの曾孫であり、バトゥの直系でそれにあたるものは、メング・チムールとトゥダ・メングであり、のちに汗となるトレボガやトフタよりも一世代年長であった。

(27) フョードロフ・ダヴィドフは、キプチャク汗国の右翼（西半部）であったバトゥのウルスが、彼の死後、ノガイの台頭によって、再度二分されたのではないかと推定している。キプチャク汗国の右翼の右翼（西半部のそのまた西半部）の長がノガイであった。
Г. Федоров-Давыдов, указ. соч., стр. 58.

(28) マルコ・ポーロの『東方見聞録』が、「西方のタタール人の王にマングテムルという人がいたが、王位は彼からトロブガに伝えられた。そのころなかなか勢力のあったトタマングという人物が他のタタール王ノガイの援助をえて、トロブガを殺し、代って王となった」と述べているのは、この事実に対応している。マルコ・ポーロ、青木道太郎訳『東方見聞録』、河出書房新社、二八七頁。

(29)「……トゥダ・メングは狂気と、国家事業からの逃避的傾向をみせ、長老と行者に頼りきっており、信心家と敬心家のもとを訪れ、少きに満足していた。王国が存在するならば、君主がこれを統治しなくてはならないと彼に進言する者があった。彼は、兄の息子トレボガのために王国を放棄し、そのことに喜んでいると述べた。妻、兄弟、伯父、親族、側近も彼に同意した。」（ルクネッディン・ベイバルス）
Тизенгаузен I, стр. 105—106.「トゥダ・メングは短期間だけ統治した。このあと、メング・チムールの息子たちアルグ、トグリイル、およびトクカンの長男タルトゥの息子たちトレボガ、クンチェクは、トゥダ・メングが狂気であるとの理由で、彼を退位させ、共同して五年間国家を統治した。」（ラシード）Тизенгаузен II, стр. 69.

(30)「ノガイは長いあいだ王国の支配者であり、ベルケ一族を無制限に統括していた。自分の気にいらない汗をとり除き、自分が選んだ者を任命した……さらに、このような状況がずっと続くことを願い、自分がこれらの諸国の支配者たり続けることを望んでいた。だが、トフタは彼に従属することを好まなかった。彼はノガイと戦おうとし、彼と戦争しようとした。」（ルクネッディン・ベイバルス）
Тизенгаузен I, стр. 110—111.

(31) там же, стр. 112.

(32) B. Spuler, S. 77.

(33) Г. Федоров-Давыдов, указ. соч., стр. 80.

(34) А. Экзенпляpский, указ. соч., стр. 53.

(35)「この軍（アンドレーイと汗国軍……引用者）がスーズダリの土地を荒廃させはじめたころ、ドミートリイはタタール人のもとに逃亡した。しかし、逃亡先はアンドレーイの保護者であるキプチャク汗ではなく、汗と対立して、黒海沿岸の南ルーシのステップ地帯で遊牧していたノガイであった。ノガイは以前はキプチャク汗国の軍司令官であったが、今では、完全な権力をもつ汗とみなされており、キプチャク汗でさえも彼を恐れていた。ドミートリイはノガイに丁重に迎えられたが、もちろん、これは汗に対抗していたためであった。」
А. Экзенпляpский, указ. соч., стр. 48—49.

(36) А. Насонов, указ. соч., стр. 73.

(37) ロシアの年代記では、ドミートリイの在位期間を一二七六—一二八二年、一二八四—一二九三年、アンドレーイの在位期間を一二八二—一二八四年、一二九三—一三〇四年としている。

(38) А. Экзенпляpский, указ. соч., стр. 56—57.

(39) там же, стр. 58.

(40) там же, стр. 59.